

平成24年度西宮文学案内
春講座 第2回「夙川オアシスロード～作家たちが愛した文学の道」

日時：2012年6月9日（土）14時から
場所：西宮市立中央図書館講座室
講師：土居豊氏（作家・文芸レクチャー）

土居 豊

夙川オアシスロードは、ノーベル文学賞候補4人を生んだ“文学の道”です。地元の方なら夙川オアシスロードは日常的に使っている言葉かと思いますが、実はゆかりの作家たちが大勢いて、その中からノーベル賞に絡む作家が4人も登場している、そういうことを改めて思ってみたら面白いなということで語ってみたいと思います。

まず、4人のうちノーベル文学賞を受賞しているのは誰でしょう。今、写真を出しましたが、にこやかに歩いてらっしゃる青年は大江健三郎さん。たくましい男性とおじいちゃんが談笑しているのは三島由紀夫と川端康成です。ポーズをきめて写っている写真は村上春樹さんですね。村上さんは、国内でたとえば新聞なんかに掲載するときは何となくダサイ感じの写真が載るんですが、これはたまたまインターネットで見つけた写真で、パリの新聞に掲載のをコピーさせてもらって載せたのですが、海外ではおしゃれなスタイリッシュな感じで写っているなど国内との差を感じます。

この中の2人がノーベル文学賞を受けています。大江健三郎さんと川端康成さん。川端さんは日本人として初めてノーベル文学賞を受賞されました。村上春樹さんはノーベル文学賞を受けているわけではないんですが、毎年のように候補として名前があがります。三島由紀夫さんもずっと名前があがっていながら受賞できずに悲惨な最期をとげました。ノーベル賞がそんなに有難いものか僕には分からないんですが。

皆さん右手をご覧ください、木立が見えていますね。この図書館に来るときに夙川沿いに来られた方は、このへんを歩いて曲がったはずですが、目の前が夙川オアシスロードで、後ろに酒蔵通りがある。すばらしいロケーション会場を用意していただいたんですが、この夙川オアシスロードを村上春樹さんがなんで歩いたかという、小さい頃このあたりに住んでいたんですね。のちに芦屋のほうに引っ越していかれますけども、このへんで遊んだはずですが、ご本人のエッセイにも夙川にかかる橋のことが出てきたりします。

遠藤周作さんは、夙川オアシスロードを阪急夙川駅までさかのぼったところにある夙川カトリック教会で洗礼を受けました。しばらくこの近辺にも住んでおられて、このあたりをウロウロしたことがエッセイにも書かれています。

もう1人は井上靖さんです。井上靖が作家としてデビューした当時の作品の何作かは、阪神間を舞台にしたちょっとメロドラマちっくな作品でして、その中にももちろん夙川も登場しますし、ご本人が川添町に住んでいらしかったということでもあり、夙川ゆかりの

作家ということになります。

遠藤周作も井上靖もノーベル文学賞候補に下馬評として挙げられた人たちです。つまり夙川が生んだノーベル文学賞の候補の4人というのは、谷崎潤一郎、遠藤周作、村上春樹、井上靖という4人の作家です。

晴れた日の夙川オアシスロードは非常に気持ちのいい散歩道で、日常的に夙川公園のあたりは午後、幼稚園生とかがいっぱい遊んでいる風景が見られますし、私生活に溶け込んだ空間です。今日は図書館から海辺のほうに行こうかなと思っているんですが、だいたい夙川の散歩道といえば、このあたりまでは来ないと思うんですね。だいたい阪神香櫨園…まで。ここから海のほうへ行くのは、なんか目的があるか、海辺を散歩するからというわけで、夙川の散歩道として下流のほうは覚えがない方もいるかもしれませんが、実は下流のほうに文学関係のことがたくさん登場します。

香櫨園から阪急夙川までは散歩道としてよく歩かれるあたりじゃないかなと思います。桜の時期は阪急夙川のほうへ歩いて行くと綺麗ですよ。辰馬考古資料館があつたり、阪急とJRの間の片銚池ですとか、見どころはたくさんあって、散歩するには非常に気分のいい道です。阪神間を通る電車は、阪急からJRも、JRから阪神の乗り換えもけっこう厄介な3本の路線ですが、夙川をちょっとくだって乗り換えると案外スムーズで、そのあたりはみなさんのほうがよくご存じだと思います。

遠藤周作は学生の頃、夙川界隈から仁川のほうへ引っ越しますが、この阪神間をウロウロ生活して、私立の灘中・高校出身でかなり落第生になっちゃってみたい話をエッセイでもユーモラスに語っています。

『黄色い人』は、初期の頃の中編で、完全に自伝的な小説です。新潮文庫の薄い文庫に入っています。この中には、戦争中の阪神間でのカトリック神父の苦難の話と、主人公の語り手である学生との語りがかわりばんこに出てきまして、戦争中を通じて信仰の問題をどう考えるか、どう生きるかという深刻な重いテーマをはらんだ自伝的小説です。これは意図的だと思うんですけど、遠藤周作が10代初めの頃に洗礼を受けた夙川カトリック教会と、そこでお世話になった神父さんをモデルに書いていると思われるのに、小説では仁川の教会に場所を移して展開します。遠藤周作のお母さんが仁川のほうにお勤めで、そのお母さんが洗礼を受けたのも仁川の教会でしたので、自分が洗礼を受けた夙川カトリック教会を舞台にはせず場所を変えて描いているなという気がします。お母さんは小林聖心で音楽の先生をされていて、遠藤周作とお兄さんは夙川カトリック教会で洗礼を受けました。遠藤周作の有名な小説の中で夙川を舞台にした小説というのは実はあまりありません。エッセイには夙川近辺のことが書かれていますが、小説の中にストレートに書いていないのは何か憚ることがあったのか、あるいは書きたかったけど書けなかった事情があるのかもしれません。

遠藤周作は多面性を持った作家ですが、僕の第一印象は、「作家・遠藤周作は知っている」とキャッチコピーが子供のころ耳に残りました。ネスカフェのCMは何人もの作家を使っ

ていてコーヒーのイメージと繋がっていますので、良かったような悪かったような気がします。狐狸庵シリーズ、ユーモアエッセイの作家という風に受け取る方も大勢いると思います。文芸春秋で易者になった写真もあります。そういう何となくユーモラスなエッセイを書かれる、よく分からないおっちゃんというイメージで取られる方もいらっしゃると思います。私の中では長くコーヒーのCMの人でした。

それからしばらく忘れていて、あとで浮上してくるのは『沈黙』という小説の作家としてのイメージです。もちろん多面的な作品を書いておられるわけですが、遠藤周作の最も重要なテーマとして、ご本人も信者であるカトリックの信仰をテーマに書いた小説というのが太い柱としてあります。私はカトリックの信仰と縁もゆかりもないんですけど、音楽が好きだったもので、思いがけないところで『沈黙』と深く関わることになりました。阪急夙川の線路から見える夙川カトリック教会のことは知っていましたし、あそこを拠点にテレマン室内オーケストラというバロックの楽団が活動しているのも知っていました。阪神間の名所の一つとして意識はしていましたが、遠藤周作の作品と夙川カトリック教会をつなげて考えてはいませんでした。『沈黙』を読むときにも、『黄色い人』の中にも登場する信仰が試されるという厳しいテーマから、遠藤周作はずっと自分がカトリック信者であることにこだわって作品を書き続けたんだなという漠然としたイメージしかなかったんです。

エッセイ『心のふるさと』の中で、阪神・淡路大震災で被害を受けた阪神間の風景について遠藤周作が愛惜を込めて語ったエッセイがあり、被害を受けた夙川カトリック教会のことも語っていますが、遠藤周作の面白いところはあんまり深刻なことは書いてないんですね。いろんなエッセイやインタビューに登場する夙川カトリック教会がらみの有名なエピソードといえば、教会で周作少年が大騒ぎして神父さんにとっちめられた話が繰り返し出てきまして、幼馴染たちに年をとってからも言っているということで、なんかユーモラスな話ばかりしているんです。遠藤周作が子供の頃はオアシスロードとは呼ばれてなかったわけですが、夙川公園をエッセイで語るときに、「自転車で走って女の子を探しました」という話がこれも繰り返し出てきます。少年時代の周作さんがこのあたりを走り回って女の子を探していたというイメージです。

高級チックなお屋敷、綺麗な住宅地の中を10代の少年が自転車で走って、ひょっとして綺麗な女の子が歩いているのを見かけるかもしれないとか、夙川公園のベンチで本を読んでいる綺麗な女の子がいたらいいなといった、少年の頃の憧れの気持ちがユーモラスに語られるわけで、何か分かる気がします。女の子見つけてどうこうということではない。「見つかるわけではないが」と文章に書いていまして、憧れの気持ちがものすごく表れているような気がします。

もう一つは、『黄色い人』で仁川の教会に舞台を変えて描いていますが、夙川カトリック教会で周作少年が小さいときお世話になったメルシエ神父というのは、第二次大戦中に外国人ということでスパイの嫌疑をかけられ憲兵隊に連れて行かれたことがありました。『落

『第坊主の履歴書』というエッセイに書いていましたけど、戦後の遠藤周作は夙川から離れていますのでメルシエ神父に関しては直接は知らないわけですが、幼馴染の話をおとから聞いたところによると、日本軍に捕まってひどいこともされたらしいんですが、嫌な思い出のことは口にしなかった立派な神父さんであったということが語られています。『黄色い人』に出てくる何となくちょっとみじめたらしい神父さんがいますが、そのへんは自伝的でありながらかなり脚色が入っているのはエッセイと読み比べてみればよく分かります。

『黄色い人』には阪神間の風景があちこち出てきます。夙川沿いの道のことが描写されていないのが残念ですけど阪神間の風景が美しく描写されています。周作少年も夙川の桜を見て育っているわけで、夙川ゆかりの文学というときに甲陽線も登場します。平中悠一という若い作家が阪神間を舞台に書いた青春小説『She's Rain』が映画化されて話題になりましたけど、阪急の甲陽線に乗り換えるところに女子高生たちがいっぱい白い制服姿で歩いているところが印象的に描かれているシーンもあり、同じような形で『涼宮ハルヒの憂鬱』という西宮ゆかりのアニメの中にも甲陽線の乗り換えのホームのことが描かれています。おそらく風景として印象的なものがあるんだと思います。

夙川の駅前から夙川カトリック教会の塔が飛び出して見えます。阪急夙川駅と夙川カトリック教会というのは切っても切れない一つの風景として出来上がっているわけです。遠藤周作の『沈黙』は、一つの代表作といわれるシリアスな小説です。キリシタン禁制の頃に日本へやってきたカトリックの神父が踏み絵を踏まされる話で、ストーリーとしては単調なシンプルなものですけど、信仰を巡って葛藤する人間の弱さが色濃く描かれて海外での評価は非常に高い。どちらかというと海外の研究者のほうに『沈黙』について論じているものがたくさんあります。

亡くなられた作曲家の松村禎三さんが『沈黙』をオペラ化されていて、日本の原作で日本人が作曲したオペラとしては珍しく何度も繰り返し上演されています。この間、東京の新国立劇場でも上演されていました。日本人作曲の日本語のオペラでもっとも繰り返し上演されるのは團伊玖磨さんの『夕鶴』ですが、松村禎三さんの遠藤周作『沈黙』も繰り返し演奏されているほうだと思います。はっきり言って、音楽的には難しく、登場人物もあまり面白くなく、オペラとして面白い作品かというよく分からないんですが、普遍的なテーマを扱っているのと、劇的な迫力の展開があり、どっちかといえば音楽的な魅力というより演劇的な魅力で魅せる作品だなと思います。

何年も前になりますが東京の新国立劇場でオペラ『沈黙』の再再演…3回目くらいのとき舞台裏に密着取材したことがあり、曲もあまり知らなかったのですが、昔読んだきり放置していた原作の『沈黙』をもう1回読みだしたわけです。松村禎三さんを取材したときは、身体も悪くされていて、それでも作曲家というのはすごいですね。練習に逐一付き合っていて、演奏者のほうは若干迷惑そうだったんですけど、いちいちダメ出しをされる。自分の作品に愛着があって、上演のリハーサルにも顔を出してチェックを入れてました。

主役のテノールがカトリックの神父を演じます。キリシタン禁制の日本にいるカトリック教徒たちが踏み絵を踏まされる、弾圧されているのにカトリックの神父がさらに布教しにくるという話です。主役のロドリゴという神父は信仰のために踏み絵を踏まず命を落としていく人たちが神が救わないのは何故かという葛藤に苦しめられ、とうとう最後は自分も踏み絵をふまされ信仰が揺らぐ葛藤を演じます。重いオペラなのでやりがいはあると思いますが、主役の方にいろいろ話を聞くと、曲が難しく…あまり大きな声では言えませんが、オペラというのは基本的に音楽大学を出てオペラを学んだ歌手たちがイタリア語の歌を学ぶわけです。イタリア語のオペラが基本で、ドイツ語なりフランス語なり、要するにヨーロッパ言語で歌うことを学んできた人たちなので、日本語の歌詞を歌うのがものすごく難しいらしい。実は日本語のオペラはあまり歌いたくないとおっしゃっていましたが、練習そのものは非常に力が入ったものでした。楽譜にも作曲者が後から修正を加えていろいろ書きこみがあったり、演出も手のこんだ演出をしているプランがあったり。新国立劇場の舞台袖のところに背景の舞台の転換の図がずらっと貼ってあり、かなり手のこんだ装置で上演されて、見ごたえのあるオペラでした。

遠藤周作の作品と信仰の問題が如実に現れているのが『沈黙』で、あまり注目されていないかもしれませんが、初期の名作でもある『黄色い人』にも信仰を試される葛藤がうまく描かれています。お母さんが小林聖心にお勤めだった関係で仁川にも住んだことがあり、甲山や仁川の風景は遠藤周作の中でも親しい阪神間の風景でもあり、『黄色い人』は仁川と甲山の風景をベースにして信仰の問題が描かれています。夙川の風景も遠藤周作が小説の中に描きこんでくれたらよかったのに。直接は小説に使わないとしてもエッセイの中で繰り返し語られるように、遠藤周作が心を育んだ原風景として夙川があるはずなんです。次は井上靖に話を移します。井上靖と夙川がストレートに結びつくのは『猟銃』という初期の作品です。『猟銃』と『鬨牛』を並べて読みますと、『猟銃』は今から読むとちょっと古臭い感じがしてしまう。手紙の文体で書かれていたり女性の語りで書かれていて文章は巧みですけど、昔のメロドラマという感じです。『鬨牛』は西宮球場で鬨牛が開催された話を基に小説にして、新聞記者時代の長かった井上靖が時事ネタをうまく小説にしてしまう技みたいなものが冴えわたっているなど読んでいて感じます。どこまでが事実でどこまでがフィクションなのかちょっと分からないような話が展開して、虚実とりまぜた筆のうまさみたいなものが『鬨牛』には表れています。

映画『猟銃』には昔の国鉄神戸駅から旅立つ場面が描かれていまして、それを陰から追いかけてきて女性がつけまわす。小説も映画も阪神間の昔の場面がいくつかあり、そういう意味では井上靖の夙川沿いに住んでいた頃の体験が反映されていると思います。小説『猟銃』の物語そのものは阪神間の昔のお屋敷を舞台装置に使ってメロドラマを書いたような印象です。映画には昔の懐かしい俳優女優がいっぱい出てきて、そういう意味で見て面白いのかもしれませんが。映画の『猟銃』は、よくできているかはちょっと分かりません。『猟銃』をカナダで舞台化したものがあるようです。

『猟銃』には夙川の場面が出てきます。井上靖が戦時中に一時期おそらく下宿ですけども川添町に住んでいた時代があり、そのころの体験も反映されていると思います。映画の場面としては、女子学生が阪急電車の夙川駅まで来て家にテキストを取りに芦屋のお屋敷に帰り、まずいものを見てしまったような場面があります。芦屋から夙川にかけてのお屋敷街を舞台にした小説のシーンが確かに出てきます。舞台装置としては有効だったと思います。『闘牛』は事実を基にして小説にしていますが、球場で闘牛をやったというのが意外性あり、どこまでが本当の話でどこまでが小説なのか判然としないところがまた面白い。夙川オアシスロードは出てきませんが、西宮球場から見た阪神間の風景や、阪神間を舞台に闘牛の興行をやろうとする面白い男たちがいっぱい出てきて、ユニークな、読んで面白い小説になっているなと思いました。

井上靖は各地を転々としています。京都大学に入り教授の御縁で結婚もして、新聞社勤めになって大阪に住み、夙川のあたりに住んでと関西が長いんですけど、あまりご自身の意識の中では関西に影響されたことはないと書いています。方言もほとんど使わなかったということですので、関西の風土に対して醒めたところがあったのか抵抗があったのか…でも作品の中で舞台装置として巧みに阪神間・夙川の辺りを使っているのも確かです。井上靖が住んだであろう川添町の近辺のあたりまでJRから下ってくる風景は井上靖も散歩していたはずですよ。夙川公園の立札、看板が立っている交差点があり、西宮市が用意したプレートには井上靖のことも書かれています。香櫨園の駅へ戻る途中に川添橋があり、最初知らずに村上春樹の舞台を探していた時これが村上春樹が書いている橋かなと知らずに見ていたことがあったんですが、村上春樹はもっと下流の葭原橋という橋ですね。町の名前はカワゾエ町なのに橋はカワソエ橋というんです。そのへんの名前の違いは何なんだろうなというのも興味深いんですが、もともとはカワゾエ町だったんですかね、それとも橋の名前だけ変えたんですかね。

夙川公園のプレートには「作家井上靖は新聞記者時代に川添町に住んだ思い出を数々の名作の舞台として描きます」と書いてあるんですが、プレートにはひいき目がありまして（笑）、井上靖ゆかりの西宮といえば、『猟銃』の舞台である夙川よりも『闘牛』の舞台である西宮球場のほうが大きくクローズアップされるのかなという気がします。

村上春樹は西宮球場をエッセイの中に紹介しています。阪神間に暮らした少年時代、西宮球場に何度もお世話になったんだと思います。野球関連は甲子園のほうが多いんですけども。

村上春樹は京都で生まれすぐに西宮のほうに引っ越してきて、西宮の風景におそらく原風景として馴染んだものがあつたと思います。なぜか小説の中に登場する西宮の風景というのは特定できるものが少なく、芦屋のほうが特定されているお猿の公園とかたくさんあるわけですが、『1973年のピンボール』に登場する灯台がおそらく今津の灯台であろうということはよく言われています。『ねじまき鳥クロニクル』の中で甲子園球場の回想があつたり、はっきり特定できないような形ですが西宮で過ごした子供時代の原風景が小説の

中に顔を出しています。

エッセイの中では西宮の図書館によく通ったということ書かれています。村上春樹がいた頃は、今とは場所が違いますが中央図書館でお世話になっていることは間違いない。もう一つ、ほぼ定説じゃないかと言われていますが、『ノルウェイの森』に、夙川を下っていったところの回生病院が登場していると思われます。映画『ノルウェイの森』では登場しませんが、小説『ノルウェイの森』の中に直子というヒロインが入院をしている回想があり、高校生の頃の直子が手術で西宮の海岸の病院に入院しているというエピソードがあって、そこをワタナベとキズキがお見舞いに行くという思い出話が出てくる。その海岸の病院が回生病院だろうと考えられています。『ノルウェイの森』の場合も地名が出てこないのので確定はできませんけれども。村上春樹の育った家から回生病院がすぐですから、風景のイメージとして海岸の病院というのは間違いなく原風景としてあるはずです。

『ランゲルハンス島の午後』というエッセイに登場する橋が夙川の下流にある葎原橋であることもおそらく確定されています。村上春樹に関連した夙川の風景というのは、阪神香櫨園から下流のほう、ご本人が住んでいた地域を中心によく小説やエッセイの中に登場します。香櫨園の海水浴場の昔の写真があって、村上春樹も小さい頃は夙川の河口あたりで水遊びをしていたことがあるということです。昔は賑わった海水浴場だったそうで、御前浜は今でも阪神間の貴重な砂浜としてマリンスポーツによく使われていますが、泳ごうという気にはならないですね。夙川の河口も子供たちが遊んでいる様子が写真に撮られています。今も水遊びするには不足のない水ではないかなと思いますね。（昔の回生病院の写真を見せる）昭和48年のことですので、もし『ノルウェイの森』の直子が入院していたらこのようなイメージの病院だったのかもしれませんが。夙川の河口のほうですので、海風が非常に心地よい。夙川の河口から回生病院が見えるし、さらに芦屋の浜風町住宅も見えているので、夙川の河口近辺というのは村上春樹ワールドの原風景だと言えるわけです。芦屋の高層住宅は『羊をめぐる冒険』に登場する高層住宅のモデルだろうと言われていきます。香櫨園浜は砂浜が広いですけど綺麗な浜辺とはなかなか言い切れない。阪神間の地形の特徴は、山から海までの距離が近く、川がまっすぐで天井川が多い。ということは、河口から振り返ると源流の山が見えているというところが特徴的です。村上春樹が育った川添町のあたりからは甲山がきれいに見えて、『海辺のカフカ』のおわん山のイメージは甲山が原形としてあるのではないかと繋がるわけです。（葎原橋の写真を見ながら）最近補修されたようでは前はボロボロだったんですが、今はわりと綺麗に補修されています。

最後に『涼宮ハルヒ』のことにふれておきます。今回、私の書きました『ハルキとハルヒ』という評論の本のテーマは、村上春樹とライトノベルとして有名な『涼宮ハルヒ』の作品との接点を探る試みですが、『涼宮ハルヒ』の原作の中にも夙川が登場します。ただ字を変えていまして、祝う川と書いて「祝川」。西宮の地名も甲陽園とか夙川とか字を変えて登場させています。作者の谷川流さんは西宮在住なので、地元の風景を使って小説を書いているのは明らかです。アニメの『涼宮ハルヒ』に登場する西宮北口の商店街の風景。今は公

園が作り変えられてしまいましたが「北口駅」という名前が登場します。これはアニメを作るときにスタッフが写真に撮って、それをそのまま風景に描いているわけですね。西宮北口近辺の珈琲屋ドリームという喫茶店はそのままたアニメの中に登場します。なぜか西宮北口から歩いて河原があるということになっていて、これは作品の中で西宮北口と夙川のオアシスロードがぎゅっと距離が縮められているんですが、中央図書館もアニメの中に登場します。図書館の中も受付のカウンターの文字もそっくりそのまま、モデルにしているのは明らかです。世界的に有名なアニメ作品の中に、こっそり夙川の桜の風景や木立の風景なんかが使われているのは面白いことです。やはり人を引き付ける風景というのが間違いなく夙川の川沿いの道にはあるということです。夙川の桜並木や夙川沿いの魅力というのは関西の人なら誰もが知っています。あえて村上春樹の作品に描かれましたとか、「涼宮ハルヒ」のアニメでこういう風に出ていますとか、そんなことは野暮だから言わないとか、最近そういうふうな気がしてきました。特に西宮市が「涼宮ハルヒ」や村上春樹に関して宣伝に使うところがあまり見えない。それはおそらく夙川は名所として有名なので、あえてわざわざ村上春樹に関連づけるとか「涼宮ハルヒ」の舞台という必要がないと考えているように窥えます。それはそれで元からの美しい風景をいろんな人が愛してくれたりいいなという気がしています。

何かご質問はありますか？ 内容に関してもよろしいですし、ディープな夙川の話でもかまわないですし、あるいはご感想がありましたらお願いします。

質問：平中悠一さんという方が阪急甲陽線の話を書かれているそうですが、今回の図書館の本の中に入っていないので、もう一度教えてください。

土居：確かに入っていないですね。『She's Rain』というタイトルで映画にもなっていますがディスクはないです。

質問：今日は『火垂の墓』の話が出るかと期待をしていたのですが…

土居：『火垂の墓』は夙川のもっとも有名な作品の一つで映画化もされています。また別の機会に取り上げることが出来たらいいんですけど、これまでたくさん語られているのであえて外しました。あえて取りあげにくい遠藤周作と井上靖に焦点を当ててみました。

質問：震災前に夙川にあった喫茶店「ラ・パボーニ」の話が聞けると思ったんですけど…文学者が集まっていた。

土居：「ラ・パボーニ」という有名な喫茶店があったということは聞いていますが、震災前にあった元のパボーニには行ったことがないんです。震災後、北新地に再オープンされた喫茶店、というよりはバーですけど、そこには何度か行ったことはあります。元の喫茶店には行ったことがないので、また勉強しておきます。今のパボーニは、ジュンク堂の入

る堂島アバンザというビルの裏手にひっそりとありますので、また行ってみてください。
本日はありがとうございました。